

フリードマン「実証経済学の方法論」再考

経済理論における仮定の性質

2006-06-17 version

原谷 直樹

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

haraya@pop16.odn.ne.jp

1. 序論

経済学説を巡る論争において、これまで大きな論点の一つになっていたのが、理論における仮定の性質、とりわけ非現実性についてであった。本稿の目的は、経済理論における仮定の性質について、特にフリードマンの論文「実証経済学の方法論」¹(以下 F53 と表記)とその解釈と評価を巡る議論を再検討することにより、何らかの規範的、あるいは方法論的指針を提出することにある。本稿の構成は以下ようになる。まず第二節において、仮定の非現実性を巡る基本的な対立の構図を示したうえで、本稿における F53 の検討の射程と方法を明らかにする。次に第三節では、現在までに提示された様々な F53 の解釈と評価のうち、代表的なものを取り上げ、それらの妥当性について F53 のテキストと照応させながら検討を行う。最後に、第四節においては、仮定が持ちうる多様な役割という視点を提案したうえで、F53 への暫定的な解答と今後の課題を提示する。

2. 本稿の目的と射程

経済理論、とりわけ現在の主流派である新古典派経済学に対して、繰り返し指摘され批判の対象となってきたのが、理論で用いられる仮定の非現実性であった。確かに新古典派理論においては、効用最大化原理や完全情報の仮定に代表されるように、多くの反直感的な仮定が置かれ、それらを基に理論が構成されていると言えよう。これらの諸仮定は、現実の人間の主観的、客観的認識からして誤りであり、実在する人間の意図、能力、性質をそのまま記述してはいないという意味において非現実的である。しかし、仮定の非現実性を指摘するということは何故、そうした仮定を含む理論に対する批判になりうるのだろうか。言い換えれば、仮定の非現実性はどのようにして問題とされるのだろうか。この点については、実は批判者の側でも完全に見解が一致しているとは言いがたい。

まず考えられるのが、理論を構成する諸仮定は全て現実的なものにすべきであるという批判である。これは理論が完全に現実の正確な記述となるべきという主張であり、ある理論に非現実的な部分が含まれることはその理論の不完全性を意味することになるので、発見され次第、現実に対応する記述に置き換えられるべきであるとされる。したがって理論の仮定においても、それがいかなる仮

¹ Friedman(1953) The Methodology of Positive Economics.

定であれ、現実的になればなるほど良い理論になると考えられるのである。しかしながら、どれだけ詳細な記述を試みても現実世界を逐語的に言及し尽くすことは不可能である以上、こうした立場においては、いかなる理論も常に不完全であり、修正を迫られていると言えよう。

もう一つ考えられるのは、新古典派経済理論が、非現実的であってはならない部分に誤った仮定を置いているという批判である。これはある理論の正しさ、あるいは有効性について、理論の構成要素それぞれに異なる役割があり、全てが現実の正確な記述である必要はないが、ある部分においては、現実と正しく対応関係を持つ必要があるという考え方である。したがってこのような主張に立つ場合には、非現実的な仮定の存在を指摘するだけでは批判として不十分であり、それが理論に対してどのような影響を及ぼすのかを示す必要があるだろう。

仮定の非現実性に対する批判は概ね、上記二つの立場のどちらかに分類されると考えられるが、こうした批判に対して、新古典派経済理論を擁護する側はどのような反論を用意しているのだろうか。最も多くみられる反論は、仮定が非現実的であったとしても、それらから構成される理論や、あるいはその理論から導出されるモデルや予測が現実の現象に合致すれば良いというものである。これは理論それ自体の真実性よりも、その理論が現実の予測や制御といった目的に適うかという点で理論を評価するという意味で道具主義的な立場²であると言えるだろう。

こうした立場の理論的基礎を与えると考えられてきたのが F53 である。F53 は 20 世紀後半の経済学方法論についての論文のなかで最も有名なものと言っても過言ではなく、多くの経済学者から繰り返し言及され続けているが、その正確な内容に関しては定まった見解があるとは言いがたい。そこで次節以降では、20 世紀の経済学方法論における、とりわけ非現実的な仮定の性質に関する議論の中心的地位にある F53 とそれに対する多様な解釈を実際に取り上げて再検討を行うつもりである。

ここで本稿の目的とそのため採用する方法を明らかにしておきたい。本稿の目的の一つは F53 の再検討にあるが、その方法としては複数の選択肢がありうるだろう。まず、フリードマンが実際に F53 において何を意図していたのかということ F53 のテキスト内在的に、また他のフリードマンの著作との関係から検討する学説史的研究が考えられる。しかし、多数の F53 に関する論文における解釈の相違は、フリードマン自身が論理的に一貫した方法論的主張を論文内において展開していると捉えることが非現実的であることを示しているように思われる。さらにフリードマンが F53 の公表後、F53 を巡る論争に対する応答を公式には全く示していないということも、フリードマンの意図を読み取ろうとする試みをさらに困難にしている。他にも、なぜ F53 がここまで多くの経済学者たちに受け入れられたのかという科学社会学的研究が考えられるが、これでは F53 の方法論史上におけ

² ここでの道具主義とは純粋に方法論的な意味においてであり、通常の哲学的意味での道具主義とは異なる。両者の扱いについては注意が必要であるが、それについては後に詳しく検討する。

る歴史的意義は明らかに出来ても、理論的意義を理解するためにはあくまで副次的な役割しか果たせないだろう。

したがって、本稿では上述の方法とは異なり、F53 をフリードマンの意図から離れて、複数の相互に異なる方法論的主張の集合体として捉える。そのうえで、これまでの F53 の多様な解釈とそれらを支持する F53 内の記述を手がかりに、F53 から導出可能な複数の方法論的主張の意味内容を検討するという方法を採用する。こうした作業を通じて、より有望かつ一貫した方法論的主張としての F53 解釈を探ることが本稿の最終的な目的である。

3. F53 の多様な解釈とその評価

F53 は発表以来現在に至るまで、多くの論者から好意的批判的両方の論評を受けているが、その初期における最も重要な定式化はサミュエルソンによる F-Twist であろう。サミュエルソン(1963)は、F53 におけるフリードマンの中心命題は「理論はその帰結(の一部)が、経験的に有用な程度に妥当な場合に正当化できる」というものであり、「理論“自体”あるいはその“仮定”の(経験的)非現実性はそれらの正当性や価値には全く関係がない」と主張していると捉え、F-Twist と命名した³。そしてこの F-Twist は、もし仮定から理論を構成し、理論から帰結を導出するという過程が厳密に演繹的であるならば支持することは出来ないと批判したのである。

サミュエルソンによる F-Twist への批判は純粹に論理的なものである。つまり、ある理論 B とそれを構成する仮定の集合 A は論理的に等値であり、また理論 B から導出され現実との対応によって真偽が判断される帰結 C も、B から C が演繹操作によって導き出されているならばやはり等値である。したがって、F-Twist が示すような帰結 C が経験的に妥当でありながら、理論 B やその仮定 A が妥当でないということは起こりえない。さらに上記 A、B、C が完全に同一ではない場合を考えてみても、理論 B から導出される帰結 C の下位集合 C- が経験的に妥当であることが判明しただけでは帰結 C 全体は正当化できず、したがって理論 B や仮定 A も同様に正当化することは出来ない。逆に、仮定 A の上位集合 A+ が存在した場合にも、その正当化の可否は帰結 C あるいは C- の正当化とは独立したものとなる⁴。したがって、いかなる場合においても、F-Twist の主張するような、非現実的な理論や仮定が、その帰結の経験的妥当性によって正当化されるということは発生しえない、というのがサミュエルソンの批判であった。

確かにサミュエルソンが捉えたように、理論とその仮定、そしてそれらの帰結の間の推移が論理的変換作業に過ぎないならば、彼の提出した F-Twist への批判は妥当なものであろう。しかし、F53 の記述を実際に見てみると、こうした把握の仕方を許さない部分が多数見いだされる。

³ Samuelson(1963) p. 232.

⁴ これらをサミュエルソンは、A+ A B C C-と表現している。Samuelson(1963) p. 234.

理論は、それを実質的な仮説のあつまりとみなすならば“説明”しようとする現象のあつまりにたいしてどの程度それが予測能力をもつかにしたがって判断されるべきである。事実の証拠がありさえすれば、それが“正しい”か“誤っている”か、あるいはさらに、試論的に妥当なものとして“受け入れられる”か“しりぞけられる”かを示すことができる⁵。

ここでは、理論とその帰結である予測、そしてそれと事実との照応は論理的に真偽が決定されるものとはされていない。事実と予測の対応関係において決定されるのは理論の真偽判断というよりもむしろ受容可能性である。つまりサミュエルソンは、経験的妥当性によって理論が「正当化される」という言明を、理論の「真偽が与えられる」と理解しているが、実際の F53 においては理論が「許容される」ことを意味するだけで、理論の真偽に関しては不確定のままなのである。またフリードマンは他の箇所でも以下のように述べている。

そのような(経験がもたらす:筆者)証拠は解釈することがはるかにむずかしい。それは、しばしば複雑であり、またつねに間接的かつ不完全である。そのような証拠を収集するには、しばしば骨が折れるし、また一般にそれを解釈するには細かな分析や入りくんだ推論が必要であり、それが真に確信をあたえるものであることはめったにない。“決定的な”実験の劇的で直接的な証拠が経済学には与えられないために、仮説のじゅうぶんなテストが妨げられるのである⁶。

ここではさらに、経済学においては経験的事実が、即座に理論や仮説の真理値を定めるほど決定的ではありえないということが主張されている。これに対して、サミュエルソンが見いだしたという F-Twist を支持するような記述を F53 の中から見つけ出すことは困難である。むしろ、サミュエルソンにおいては直結しており、真偽の判断基準を与えるとされていた、帰結 C と経験的事実との間の関係のルーズさが繰り返し指摘されていると言える。したがって、サミュエルソンによる F-Twist の定式化は、F53 の一部の言明を過度に戯画化した、批判のための描写であって、F53 の部分的表現としても不適當であると結論づけられるだろう。

それでは、F53 における理論や仮定、そしてそれらがもたらす予測と事実との関係をどのように捉えたらよいだろうか。ボランド(1979)は、F53 を道具主義的主張と捉えることによって整合的に理解できるということを初めて体系的に示した論文であろう⁷。これに対し批判を投げかけたのがコールドウェル(1980, 1982)であるが、F53 の主張を道具主義であるとする点においては両者の認識は一

⁵ F53, p. 8. 以下、F53 からの引用は基本的に翻訳を参照しているが、必要に応じて訳文の改変を行っている。

⁶ F53, pp. 10-11.

⁷ Wong(1973)もほぼ同様の論旨であるが、Boland(1979)のほうがより包括的に議論が展開されている。

致している。こうした見解は、F53における予測の果たす役割の重視に基づいたものである。

確かにフリードマンは「仮説の妥当性に関する唯一の適切なテストは、その予測を経験と比較することである⁸」と述べ、次のように詳述している。

この点をいまい少し逆説的でなく表現するならば、理論の“仮定”について問われるべき適切な問題は、それらの仮定が記述的に“現実的”であるかどうかではなく、というのはそれらは決して現実的ではないからであり、当面の目的にとってそれらの仮定がじゅうぶんに良好な近似であるかどうかということである。そしてこの問題は、理論が働くかどうかを、つまり、その理論がじゅうぶんに正確な予測をうむかどうかを、見さえすれば答えることができるのである⁹。

また、別の箇所では次のように述べている。

完全な“現実性”を達成することは明らかに不可能であるから、したがって、ある理論が“じゅうぶんに”現実的かどうかという問題は、当面の目的にとってじゅうぶんに良好な予測か、あるいは代替的な理論よりもすぐれた予測をその理論がもたらすかどうかを確かめて、はじめて解決されるのである¹⁰。

さらに、仮定の記述的現実性にばかり注目し、それらを直接的に改善することによって新古典派経済理論を代替しようとする試みに対しては、

この型の批判は、それらの批判点のいずれかについて批判されている理論とは異なった仮説が、広範な現象に対してよりすぐれた予測をうみ出すという証拠によって補足されないかぎり、ほとんど要点をはずしていることになる¹¹。

との反論を示している。こうした記述は、科学理論の主要な役割は当面の目的に役立つ予測を提出することであり、理論の妥当性の基準は予測を生み出す能力にかかっていると解釈することが可能であろう¹²。これを指してコールドウェルは、「理論は単なる道具であって、真でも偽でもない」と考

⁸ F53, pp. 8-9.

⁹ F53, p. 15.

¹⁰ F53, p. 41.

¹¹ F53, p. 31.

¹² ここで予測の内容が、時間的に将来に属する出来事に限定されている訳ではないということに注意を向けおく必要がある。フリードマン自身が明示的に、「予測は、すでに生じた現象ではあるが、まだ観察されていないものか、それとも観察されているが予測者には知られていない現象に関するものであってもよい」と述べている。(F53, p. 9.)

える道具主義的立場であると述べている。またボランドも、F53 は哲学的な観点から見ると非常に健全な道具主義の主張であって、F53 への批判の多くは、哲学的な道具主義の立場を理解していないことから生じていると論じている。

しかし、F53 が本当に哲学的な意味で道具主義的主張と考えられるかどうかについては注意深く検討する必要がある。哲学的道具主義とは、科学哲学の分野における長く続いた争点の一つである、科学理論の対象の实在性について的一方の見解である。この意味での道具主義の基本的主張は、科学理論は経験される事象を説明もしくは予測するための単なる道具であり、世界の実際の在り方については何も説明していないしその必要もないというものである。したがって、哲学的道具主義者にとっては、科学理論が現実世界に照らして真か偽かということはそもそも問うことが出来ない問題である。これは科学理論は世界の实在を正しく記述することを目指すべきであり、健全な理論はそれを部分的に達成していると考ええる实在論とは対立する立場であるといえる¹³。しかしメキ(1992)が指摘するように、こうした対立は観察不可能な概念を理論の中に多数含む自然科学においては重大な争点となりうるが、生活世界から概念の着想を大いに受けている社会科学においては危急の問題とはならないであろう。したがって、経済学者で、こうした哲学的な道具主義の立場にたつものは非常に少ないと考えられる。

F53 においても、この意味で道具主義というよりも实在論の立場にたっていると考えられる記述が多数みられる。例えば、企業の費用関数を擁護する部分でフリードマンは以下のように述べている。

企業行動を分析するばあい、かれらの目の色よりビジネスマンの費用の大きさを無視するほうがずっと“非現実的”なのはなぜであろうか。それに対する明白な答は、前者に比べて後者のほうが企業行動に重大な影響を及ぼすからということである。しかしビジネスマンたちの費用の規模に差異があり、かつ目の色が異なることを観察するだけでは費用が企業にとって目の色より重要であることを知ることはできない。明らかに、実際の行動と、それらのいずれかの要因を考慮に入れて予測された行動との間の不一致に及ぼすその要因の影響を比較してはじめて、それがわかるのである¹⁴。

このような主張をする際、フリードマンにとって、ビジネスマンの費用と目の色は両者ともに企業行

¹³ 实在論と現実性という二つの用語が realism という同一の単語で表されるということが、事態を混乱させる大きな要因になっていたと考えられる。つまり、フリードマンが仮定の現実性 (realism of assumption) は問題ではないというような表現をしていることから、反实在論 (anti-realism) である道具主義であるという解釈へと向かい易かったということは十分にあり得るだろう。幸いにして、日本語においては別々の用語があるのでこうした問題は起こりにくい。それでも英文から直接読み解く際に判断に迷う可能性はある。その意味で、メキが導入した实在論 (realism) と現実性 (realisticness) という区分は有益であろう。両者の使い分けの詳細な解説については Mäki(1998)を参照。

¹⁴ F53, pp. 32-3.

動に対して何らかの影響をおよぼす性質である。したがって両者ともに、理論における仮構物ではなく、現実世界に実在するものであると想定されており、その企業行動への影響力の大きさを比較しようとするのは、実際の因果的要因としての強さを推定しようすることに他ならない。このような認識は、哲学的道具主義の立場からは決して出てこないものであると言えよう。

さらに F53 には、哲学的実在論のなかでもより強い主張にたっていると解釈出来る部分が存在している。フリードマンは、科学理論やその仮定の性質に関して、「有意味な科学的仮説もしくは理論が典型的に主張することは、ある特定の現象のあつまりを理解するのに、ある要因は重要であり、しかも、その他の要因は重要ではないということである¹⁵」と述べている。また、別の箇所では、優れた予測を生み出す理論の構成要素として、「複雑な現実の本質的な特徴を抽出することをねらった一団の実体的な仮説¹⁶」が含まれるべきであると主張している。こうした言明は、経済現象について様々な因果的要因が実在しているという認識に加えて、それら要因のなかでも最も本質的なものを的確に記述することが科学理論やその仮定のなすべき役割であるという考え方に基づいていると考えられるだろう。つまりフリードマンにとって、経済理論において仮定が果たす役割は、複雑な経済現象を単純化することで、そうした現象の本質的特徴を孤立化して取り出すこととされていると理解できる。これは実在論のなかでも、とりわけ本質主義的な傾向の強い考え方であると言える。F53 に見られるこうした側面を鑑みれば、F53 に対し哲学的道具主義のレッテルを貼ることに躊躇せざるをえないだろう¹⁷。

しかし、それでは何故、実在的因果関係を抽出するはずの仮定が記述的に非現実的になりうるのであろうか。仮定が実在する本質的要因を指し示し、理論がそれらの因果的メカニズムを表現するのであれば、両者はともに記述的にも現実的であるべきではないのかという疑問が持たれうる。ここで注目すべきは F53 における次の文章である。

科学の基本的な仮説は、現象は人を欺くこと、しかも見かけは関連のない多様な現象が、より基本的な、比較的単純な構造の現れであることを暴露しようとするような証拠を見つけ、解釈し、組織化する方法があるという仮説、これである¹⁸。

これは、フリードマンが持つ、世界の実在的性質に関する非常に強い想定を示している言明であると考えられる。すなわち、世界の本質的性質は実在するけれども、日常的な生活においては知覚されることは出来ない。こうした現象の背後に隠された本質を把握し、体系的に記述する唯一の方

¹⁵ F53, p. 40.

¹⁶ F53, p. 7.

¹⁷ Caldwell(1992)では、Caldwell(1980, 1982)では上記の論点が区別されていなかったことを認めたくて、F53 を方法論に関する予測主義的道具主義(predictivist instrumentalism)であると再定式化している。

¹⁸ F53, p. 33.

法こそが科学理論なのである。このように考えると F53 における「仮説が重要であるためには、その仮定は記述的に偽でなければならない¹⁹」という言明も理解可能なものとなるだろう。経済現象の本質は、その直接的経験の表象においては、そのまま知覚されることが出来ない。それに対して非現実的な仮定とは、一見すると現実の記述に反するように見えるけれども、事物の背後に存在する本質的因果メカニズムを示しているものと考えられているのである。こうした見解に基づけば、仮定の記述的な非現実性は、理論に対して積極的な価値を持つということになる。仮定が現象の背後に隠された本質を的確に表現していればいるほど、日常的な知覚からは乖離したものになるはずだからである²⁰。

しかし、F53 の主張を以上のように理解すると、次のような疑問が浮かび上がる。すなわち、F53 は、存在論的には実在論(しかもそのより強いヴァージョンとしての存在論の本質主義)の立場をとりながら、方法論的には道具主義になっているが、果たしてこの両者の結合は健全なものと言えるのだろうか。これに関してロス(2005)は否定的な判断を下している。ロスは、メキ(1992)と同様に F53 は存在論における実在論と方法論における道具主義の二者を採用していると考えているが、この結合はメタ理論的立場としては非常に不自然なものである。したがって、F53 は実証経済学に関する方法論を提出するのではなく、実際には方法論的な白紙小切手を経済学者に与えていると批判している。これに対してメキはこの問題を、F53 を方法論としても実在論的主張と解釈することで回避可能であると論じている。両者の見解の妥当性についてはさらなる検討が必要であるが、少なくとも、これまで論じてきたように、存在論と方法論の区別とそれぞれについての道具主義の役割が明示的に示される必要性は明らかであろう。

最後に方法論的道具主義に着目して検討を行いたい。理論が何らかの目的に対するツールとして理解される際に、その良し悪しの判断基準は一体何なのであろうか。この点に関しては、F53 の中で反証という言葉が一度も使われていないにも関わらず、多くの論者がポパーの反証主義との類似性を指摘している²¹。確かに、次の文章などは反証主義の特徴を端的に示していると考えられるだろう。

それ(予測:筆者)がなんども否定されずに残存しつづけるならば、その仮説は大いに信頼されることになる。事実の証拠では仮説を“証明する”ことは決してできない。それはただ仮説の

¹⁹ F53, p. 14.

²⁰ ここで示されたようなフリードマンの科学的説明の理解は、通常指摘されているような論理経験主義、とりわけヘンペルの D-N モデルというよりも、説明的統合化説に近いように思われる。説明的統合化説の現代的展開については Kitcher(1993)を参照。

²¹ フリードマンは、F53 執筆以前にポパーの科学方法論に関する著作を読んだことはないが、第一回のモンペルラン・ソサエティの会合においてポパーとの会話から彼の方法論的アイデアに強い印象を覚えたと言っている。詳しくは Hammond(1992a)を参照。また、Mayer(1993)においても、メイヤーとフリードマンの個人的やり取りにおいて、同様の言明がフリードマンから得られたことが紹介されている。

誤りを立証することができないというだけであり、やや不正確であるが、われわれが経験によって仮説が“確証された”というばあい、一般に意味するのはこのことなのである²²。

しかし一方で、現代の科学哲学史においては、ポパーの反証主義を厳格に適用することの困難さがすでに明らかにされており、それを乗り越えるために多くの試みがなされている。果たして F53 も、こうした素朴反証主義に対する批判にさらされてしまうのだろうか。

フリードマンは別の箇所ですべて「科学には確実ということは決してなく、したがって、証拠が仮説の支持または棄却に対してもつ重みを完全に“客観的に”評価することはできない²³」とも主張している。つまり必ずしもナイーブな反証プロセスを支持しているわけではないのである。他にも、最大化仮説の検証に関して、一方で実際にそれがこれまでの研究のなかで否認されなかったということを支持の理由としながら、実際にはそれらが直接テストされることは少なく、個別事象の研究において間接的に適用可能性が論じられているので証拠として提示することは難しいと述べている。そして、「仮説を支持する証拠というものは、その仮説がくりかえし否認されなかったということから成りたっているのが常であり、その仮説が用いられるかぎり絶えず積み重ねられていくものである」とし、「長期間にわたって、その仮説が絶えず用いられ、受け入れられ、そしてまた整合的で自己矛盾のない、なんらかの代替的な仮説が展開され、ひろく受け入れられるということがなかったこと、こうしたことがその仮説の真価にたいする強力な間接的証拠になる²⁴」と主張するとき、フリードマンは、経験による直接的な反証主義というよりもむしろ、ラカトスの MSRP に近い考え方を示しているように見える。ここでは仮説の選択における科学者集団の役割が強調されていると言えよう。あるいは、「ある仮説が妥当性をもつからといって、それだけで代替的な諸仮説のうちからそれを選択するにじゅうぶんな基準とはならない²⁵」という主張も、反証プロセス以外の選択基準の必要性を述べていると解釈できないであろうか。

F53 を MSRP 的に解釈することを支持するもう一つの証拠は以下のような言明から得られる。

実証的科学的究極目標は、いまだ観察されていない現象について妥当で有意な(すなわち、**陳腐でない**)予測を生み出すことのできる“理論”もしくは“仮説”を展開することである²⁶。

このように、フリードマンは、単なる予測ではなく、新奇な事実を予測することの重要性を指摘している。こうした新奇な事実の意義の強調は MSRP の広く知られた特徴の一つである。したがって、

²² F53, p. 9.

²³ F53, p. 30.

²⁴ F53, pp. 22-3.

²⁵ F53, p. 9.

²⁶ F53, p. 7. 強調は筆者による。

理論選択の基準に関しては、F53 は通説的に理解されているよりも穏健かつ複雑な見解を示しているといえよう。ここでも F53 の見解を単一のものとして示すことは不可能であるが、少なくとも科学哲学的に時代遅れの素朴な基礎付け主義的発想であるとして片付けられるほど単純な議論がなされているわけではないのである²⁷。

4. 結論にかえて

以上に示したように、F53 のなかには、多岐にわたる論点それぞれにおいて、様々な哲学的・方法論的主張として捉えられる記述が、体系的な整理なしに複数示されている。また、これまでの F53 への論及の多くは、それらの一部分に着目したのみであり、全体としての複雑性を等閑視してきたと言ってよいだろう。こうした議論に対してメキ(2003)は、F53の複数的な読解可能性自体を正面から受け止めて、F53 を様々な方法論的主張の混合物(F-Mix)であると理解すべきと主張している。しかし、本稿における F53 の詳細な読解から示唆されたように、F53 の構成要素には相互に両立し得ないという意味で混合不可能な方法論的主張がいくつも存在している。したがって、F53 を F-Mix と捉えること自体は正しいとしても、それだけでは不十分であり、さらに進んでそれらの構成要素を個々に検討し、妥当性を論ずる必要があるだろう。言い換えれば、よりミクロな視点にたった探求が求められているのである。こうした研究を展開することは残された課題であり、本稿において提示することは出来ないが、今後の方向性を指し示す一例として次のようなことが指摘できる。

これまで見てきたように F53 の中には多様な解釈を可能にするような様々な方法論に関する主張が散乱しているけれども、フリードマン自身が最も分量を割いて論じている方法論的テーマは、非現実的な仮定の問題であろう。その意味では、断片的かつ相互に矛盾しうるとはいえ、F53 の主要目的は何らかの方法で経済理論における非現実的な仮定の採用を擁護することにあったと言えよう。また、F53 に関する多くの論文も、F53 がどのような仕方で非現実的な仮定を擁護しているかを解釈し、それに対して可否の判断を下すというものであったと考えられる。

しかし、ここで一つ、大きな疑問が持ち上がる。先に見たように、F53 の中にも異なる仮定の役割が扱われており、一口に非現実的な仮定が良いか悪いかと判断を下すことが出来るのであろうか。

こうした観点から、経済理論における仮定の果たす様々な役割を個別に明らかにし、それぞれに対して非現実的な仮定が利用可能かどうかを検討しようとする研究が複数見られる²⁸。以下に、そうした既存の議論を整理し、異なる役割を持つ仮定の種類のうち主だったものを例示する。

²⁷ F53 の多様な読解可能性は、部分的には次のような解釈も可能にする。フリードマンが経済学者の証拠は決定的なものではなく、満足なテストがなされない場合には「必要な判断は手持ちの不十分な証拠に基づいておこなわざるをえない」と述べ、テストが可能な場合においても、「それを行う科学者たちの背景は、かれらの到達する判断と無関係ではない」(F53, pp. 30.)と論じていることから F53 を社会構成主義として読むことも出来なくはないだろう。

²⁸ こうした試みを体系的に示しているのは Musgrave(1981)や Mäki(2000)であるが、Machlup(1955)、Melitz(1965)、Mayer(1993)なども仮定の異なる役割とそれらの分類について論じている。

これまでの研究で、経済理論の仮定には少なくとも次のような種類が存在することが示されている。まず、ある要因を対象とする現象に対して、非常に弱い因果的影響力しかもたないために無視することが可能であると仮定する、無視可能性仮定と呼ばれる役割があるだろう。あるいはそれによって理論が関連する領域を確定し、理論の対象外となる要素を除外する、領域仮定というものも挙げられる。また、理論構築の簡便化のために、ある要因を、理論展開の初期段階において無視可能であると仮定する、初期仮定という役割も考えられる。少なくともこの三つは、同じ仮定という用語によって異なる役割が期待されている例である。そして、これらについて仮定の真偽を考えると、無視可能性仮定においては、記述的に偽であることは可能であるが、実質的な真偽自体は何らかの方法で検証される必要がある。また、領域仮定においては、もしこれが記述的に偽であるならば、理論の適用可能な領域が存在しないということになるので、真であるべきと言える。最後の初期仮定については、その役割からして常に偽であるけれども、理論の形成過程において、正しい仮定へと適切に緩和される必要があるだろう。

これらは経済理論の諸仮定を個別に検討することによってさらなる詳細な分類を提示することが可能だろう。しかし、ここに示された暫定的リストであっても、それぞれにとって仮定の真偽が持つ意味は異なる。したがって、仮定の非現実性が問題なのかどうかを論じる際には、こうした仮定の役割の認識が必要不可欠になるということは明らかである。その意味で、これまでの議論は不透明なものであり、検討の余地が残されていると言えるだろう。言い換えれば、方法論についての研究が経済学の発展に対して貢献する可能性もまだ十分に残されているのではないだろうか。

参考文献リスト

- Blaug, M. 1980. *The Methodology of Economics: Or How Economists Explain*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Boland, L. A. 1979. A Critique of Friedman's Critics, *Journal of Economic Literature* 17(2): 503-22.
- Boland, L. A. 2003. Methodological Criticism vs. Ideology and Hypocrisy, *Journal of Economic Methodology* 10(4): 521-6.
- Caldwell, B. 1980. A Critique of Friedman's Methodological Instrumentalism, *Southern Economic Journal* 47: 336-74.
- Caldwell, B. 1982. *Beyond Positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century*, London: George Allen and Unwin. 堀田一善・渡部直樹監訳『実証主義を超えて: 20世紀経済科学方法論』中央経済社、1989年。
- Caldwell, B. 1992. Friedman's Predictivist Instrumentalism: A Modification, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 119-28.
- Friedman, M. 1953. The Methodology of Positive Economics, *Essays in Positive Economics*, Chicago: Chicago University Press. 3-43. reprinted in D.M. Hausman (ed.) 1994. *The Philosophy of Economics: An Anthology*. 180-213. 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房、1977年。
- Hammond, J. D. 1992a. An Interview with Milton Friedman on Methodology, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 91-118.
- Hammond, J. D. 1992b. The Problem of Context for Friedman's Methodology, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 129-47.
- Hausman, D. M. 1992. *The Inexact and Separate Science of Economics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hausman, D. M. 1998. Problems with Realism in Economics, *Economics and Philosophy* 14: 185-213.
- Hempel, C. G. 1962. *Aspects of Scientific Explanation*, New York: The Free Press.
- Kitcher, P. 1993. *The Advancement of Science: Science Without Legend, Objectivity Without Illusions*, Oxford: Oxford University Press.
- Lakatos, I. 1976. *Proofs and Refutations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lawson, T. 1992. Realism, Closed Systems, and Friedman, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 149-69.
- Machlup, F. 1955. The Problem of Verification in Economics, *Southern Economic Journal* 22. 1-21.
- Mäki, U. 1986. Rhetoric at the Expense of Coherence: A Reinterpretation of Milton Friedman's Methodology, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 4: 127-43.

- Mäki, U. 1992. Friedman and Realism, *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 171-95.
- Mäki, U. 1994. Reorienting the Assumptions Issue. in R. Backhouse (ed.), *New Directions in Economic Methodology*, London: Routledge. 236-56.
- Mäki, U. 1998. Realisticness, in J. Davis, Wade Hands, and U. Mäki (eds.), *Handbook of Economic Methodology*, Aldershot: Edward Elgar. 409-13.
- Mäki, U. 2000. Kinds of Assumptions and Their Truth: Shaking an Untwisted F-Twist, *Kyklos* 53(3): 317-36.
- Mäki, U. 2003. 'The Methodology of Positive Economics'(1953) Does Not Give Us the Methodology of Positive Economics, *Journal of Economic Methodology* 10(4): 495-505.
- Mayer, T. 1993. Friedman's Methodology of Positive Economics: A Soft Reading, *Economic Inquiry* 31(2): 213-23.
- Melitz, J. 1965. Friedman and Machlup on the Significance of Testing Economic Assumptions, *Journal of Political Economy* 73(1): 37-60.
- Musgrave, A. 1981. 'Unreal Assumptions' in Economic Theory: The F-twist Untwisted, *Kyklos* 34: 377-87.
- Nagel, E. 1963. Assumptions in Economic Theory, *American Economic Review: Papers and Proceedings* 53:
- Popper, K. R. 1959. *The Logic of Scientific Discovery*, New York: Basic Books.
- Popper, K. R. 19635. *Conjectures and Refutations*, 2nd ed., New York: Harper and Row.
- Ross, D. 2005. *Economic Theory and Cognitive Science: Microexplanation*. Cambridge: The MIT Press.
- Samuelson P. 1963. Problems of Methodology: Discussion, *American Economic Review: Papers and Proceedings* 53: 231-36.
- Wade Hands, D. 2001. *Reflection without Rules: Economic Methodology and Contemporary Science Theory*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wade Hands, D. 2003. Did Milton Friedman's Methodology License the Formalist Revolution?, *Journal of Economic Methodology* 10(4): 507-20.
- Wong, S. 1973. The "F-Twist" and the Methodology of Paul Samuelson, *American Economic Review*, 63(3): 312-25.